



—特集—

イベント学会の10年を語る



Contents

座談会：イベント学会の10年—今、そしてこれから—	P1~7
寄稿：梶原貞幸 溢れる垣塙、変質する触媒 イベント学会における「イベントの科学」の役割	P8
寄稿：宮本倫明 社会変革はイベントで	P9
寄稿：師岡文男 『イベント学のすすめ』出版に向けて	P10
寄稿：野川春夫 イベント学会10年を振り返って～関宮聰夫副会長の足跡～	P11
インフォメーション	P12

イベント学会10年

2008年、イベント学会は設立10周年を迎える。既成科学とは異なる新しい学の創成をめざし、交流と創造の場を通じて成長をしてきたこの10年、そしてこれからどこに向かっていくべきなのかを、創設期から活動が続ける会員に語り合っていた。

【出席者】

井関 利明	イベント学会副会長	慶應義塾大学名誉教授
北本 正孟	イベント学会副会長	(株) カントリー代表取締役
長谷川 文雄	イベント学会前理事	前東北芸術工科大学副学長
望月 照彦	イベント学会副会長	多摩大学大学院教授
宮本 宗治	イベント学会理事	(社) 日本イベント産業振興協会本部長
【司会】		
川本 直彦	イベント学会常務理事	



川本直彦
(かわもと なおひこ)
イベント学会常務理事
法政大学スポーツ科学研究所非常勤講師
◆略歴：1958年 早稲田大学 第一文学部卒
東京都心理鑑定職 技師補
警視庁交通部 (科学警察研究所出向)
1964年 株式会社電通 マーケティング局研究部
1994年 株式会社電通ブロックスエグゼクティブプロデューサー
1996年 社団法人日本イベント産業振興協会専任研究員
1998年 イベント学会 (設立) 理事 事務局長
2002年 イベント学会 常務理事 現在に至る
◆著書：1982年「スポーツビジネス-日本企業のスポーツスポンサーシップ」(単著) 季刊 Marketing 研究1972年2月号
1973年「広告媒体の相対的価値変化に関する研究」(共著) (株) 電通 社内資料
1986年「周年記念事業考」(単著) 市政1986年1月号 (全国市長会)

司会：2008年は、イベント学会も設立10周年を迎えますのでさらなる飛躍の年にしたいと思います。今日お集まりの皆様は、創設期より本学会の活動を支えてこられた方々ですので、当時のご苦労やエピソードなどを交えて、イベント学会が何をめざしているのかをうかがえればと楽しみにしております。

井関：設立の背景については、当時事務局長だった川本さんが一番ご存知のはずですよね。東奔西走して、世界で初めての学会設立まで漕ぎつけたわけですから。何かまず話題を提供していただけると、皆さんも発言しやすくなると思いますよ。

司会：お手元に年表 (別表①) をご用意しましたので、ご覧いただきながら当時の思い返していただければと思います。

1989 (平成元) 年は、市町村制施行100周年に当たるため、全国で記念行事ブームが起きました。博覧会を開催する都市は有力企業に出展や寄付を依頼、対応に困った企業が通産省に調整を求める、という伏線がありました。中には大赤字を出した博覧会もあり、地方博覧会に対する

社会の目は厳しくなりつつあったわけです。

その中で東京都は96年、臨海副都心を会場として「世界都市博覧会」(以下「都市博」) を開催する準備を進めていましたが、開催前年に行なわれた都知事選挙に、財政赤字をもたらす都市博中止を選挙公約とした青島幸男が当選し、都市博は中止され大きな波紋をよびました。

これがイベントについて理論的な議論をする場をつくろうという動きのきっかけになったと考えています。

北本：私の経験では、すでに建設工事に着手してから博覧会が中止になったのは初めてのことで、大変なショックを受けたと同時に実害も被りました。何しろ、契約書には準備のために人を雇った人件費や仕込み費用などを補償する項目は一行もありません。「頼むよ」の一言が契約と同じ重さを持っていたわれわれの慣わしが、役所には全く通用しない。私はそれ以降、我々の立場を保証する内容が明記されていない契約書にはサインしないことにしているんですが、この出来事を

●4ページに続く

—今、そしてこれから—

別表①

イベント学会関連年表

1985	60	通産省「イベント研究会」発足 座長 木村尚三郎、小委員長 堺屋太一 国際科学技術博覧会 神戸ユニバーシアード
1986	61	「日本イベントプロデュース協会」発足
1987	62	葵博・岡崎87 未来の東北博覧会 など
1988	63	「ふるさと創生事業」／瀬戸大橋博 なら・シルクロード博 ぎふ中部未来博 青函トンネル記念博 など多数
1989	64	「市町村制施行100周年」／横浜博 世界デザイン博 アジア太平洋博 静岡県府博 など多数
1989	元	「社団法人日本イベント産業振興協会」設立
1990	2	国際花と緑の博覧会 長崎旅博 食と緑の博覧会・千葉
1991	3	I A A F世界陸上東京大会
1992	4	第1回 ジャパンエキスポ富山 三陸・海の博覧会 セベリア万博 国際船と海の博覧会・ジェノバ
1993	5	信州博 大田国際博覧会・テジョン アーバンリゾートフェア・神戸 グリーンフェア・茨城 TAMAらいふ
1994	6	通産省「第1回 イベント業務管理者資格認定試験」 世界祝祭博 世界リゾート博
1995	7	青島東京都知事「世界都市博覧会」中止を決定 「阪神・淡路大震災」イベント自粛ムード
1996	8	世界・炎の博覧会 JACE「イベント学研究会」発足
1997	9	山陰・夢みなと博 国際ゆめ交流博 「イベント学会設立懇談会」発足



北本正孟

(きたもと まさたけ)
 (株)カントリー代表取締役
 イベント学会副会長
 ◆略歴：1956年 同志社大学
 法学部卒業
 1970年代 日本テレビ「11
 PM」など、民放番組を多数企
 画・プロデュース
 百貨店、ホテル、商業空間、フ
 アクション・ショー等プロデュ
 ース
 日本万国博フランス館「フティ
 ック・ド・パリ」プロデュース
 東映映画「トラック野郎シリス
 ス」企画・プロデュース
 1983年 大阪・御堂筋パレ
 ード(以降毎年実施)プロデュ
 ーサー
 1985年 食博覧会・大阪
 (以降4年ごと実施)総合プロ
 デューサー
 1989年 '89 海と島の博覧会
 ひろしま 総合プロデューサー
 1992年 第1回ジャパンエキ
 スポ富山 '92総合プロデュー
 ーサー
 '92セベリア万国博覧会 日本
 政府館 運営プロデューサー
 1993年 '93 大田国際博覧会
 日本政府館 催事プロデュー
 ーサー
 2000年 恐竜エキスポふく
 い2000総合プロデューサー
 2001年 世界陶磁器エキスポ
 2001大韓民国 プロデュー
 ーサー
 他 多数
 ◆イベント学会
 1999年 1999年度浜松大
 会 実行委員長
 2000年 2000年度大阪大
 会 実行委員長
 2005年 2005年度兵庫大
 会 実行委員長

西 暦	昭 和 平 成	学 会 周 年	出来事	イ ベ ン ト 学 会		
				総会・研究大会テーマ	共 催	年次大会テーマ
1998	10		長野五輪 リスボン博	「イベント学会」設立 会長木村尚三郎 イベント大学 「スポーツイベント学講座1-6」	横浜市	「イベントシティの創造をめざして」
1999	11	1	「イベント業務管理者 資格認定」をJACEに移管 南紀熊野体験博	「イベントが拓く21世紀」	浜松市	イベント大学「浜松講座1-5」 浜松大会'99 「起街家時代を拓く」
2000	12	2	ミレニアム ブーム(99～) 淡路花博 ハノーバー万博	「デジタルネットワーク時代に おけるイベントの可能性」	大阪市	大阪大会2000 「世界迎賓都市・OSAKAを築く」
2001	13	3	山口きらら博 北九州博覧祭 うつくしま未来博 インバク(インターネット博覧会)	「新世紀イベントを創造する」	多摩市	2001年度多摩大会 「タウンコミュニティの再生とイベント」
2002	14	4	FIFAワールドカップ日韓大会	会長(第2代) 堺屋太一 「イベントの文化経済学」	名古屋市	2002東海大会 「大交流時代におけるまちづくり」
2003	15	5	イラク戦争開始 地上デジタル放送開始	「21世紀イベントの可能性を 探る」	—	設立5周年記念東京大会 「イベント・オリエンテッド・ポリシー」
2004	16	6	えひめ町並博 浜名湖・花博 「第1回日本イベント大賞」	「イベント・マネジメントを成功 させるために」		
2005	17	7	愛・地球博	「博覧会スタイルのイベントの 行方」	兵庫県	2005年度兵庫大会 「災害を生き抜くイベント 「耐災の日」を提案する」
2006	18	8	長崎さくら博 '06 「第2回日本イベント大賞」	「新しい時代をリードする団塊 の世代とイベント」	敦賀市	2006年度敦賀大会 「ユーラシア大陸と日本海の新しい関係」
2007	19	9	I A A F世界陸上大阪大会 東京マラソン 「第3回日本イベント大賞」	「スポーツイベントが都市に もたらすもの」		
2008	20	10	サラゴサ国際博覧会 北京オリンピック	「イベント学会設立10周年」		



井関利明

(いげき としあき)

慶応義塾大学名誉教授

イベント学会副会長

◆経歴 1959年 慶応義塾大学

経済学部 卒業

1964～66年(米)イリノイ大学

留学

1971年 慶応義塾大学文学部助教

教授

1974～75年(米)イリノイ大学

社会学部客員準教授

1990年～慶応義塾大学総合政策学

部教授

2000～07年 千葉商科大学政策

情報学部長

◆専門分野 行動科学、マーケ

ティング論、ライフスタイル論、消費

者行動分析 組織戦略論、科学方法

論

◆著 訳書 消費者行動の理論

1969 丸善

ライフスタイル発想法 1975 ダ

イヤモンド社

生活起点発想とマーケティング革新

1991 国元書房

P.コトラー 非営利組織のマーケ

ティング戦略(訳) 1991 第一法規出

版

P.コトラー 地域のマーケティング

(訳) 1996 東洋経済新報社

他 多数

◆イベント学会

「イベントロジーへの道」 01年度

研究大会基調講演 他

きちんと記録として残して、後輩達に伝えたいと考えていた時に、この学会の話

イベントロジーがめざしてきたものとは

井関：あの時は確かに大変でしたが、私としては少し違った印象もありました。それは、もう国を挙げてEXPOをやる時代が終わったような気がしていたんです。90年代半ばごろ、私共の分野では顧客革命という言葉がクローズアップされていました。これまで市場で圧倒的な支配力をもってきた供給サイドに対して、顧客の立場、つまり需要サイドにあったものが大きな力を持ち始め、需要と供給とが新しい関係を結んで社会を支える本当のデモクラシーの時代が始まった、という認識です。あらゆる分野にこの動きが広がり、大学は学生を、アーティストは観衆を、行政は市民を無視できなくなり、医療も患者と相対になってきました。

イベントにおいても、国家や行政主導で行うEXPOの形ではなく、企業、大学、地域社会、そして生活者一人ひとりの中におけるイベントというものが重視されていくと強く感じていました。

それともう一つ、私はかねてから従来の個別科学中心の学問に否定的な意見を持っていました。それぞれが勝手な定義で学問の範囲を限定し、勝手に作り上げた個別学問は隙間だらけで、その谷間に人間がいるのではないかと、という不満があったからです。それを繋げるためには、色々な立場の人が自由に議論をしたり、関わりを持つ場が必要であると感じました。イベントという共通認識のもとで、立場や職業、思想も違う人達が関わり合えるような場と新たな学問、つまりイベントロジーを、この学会を通じて育てて

いきたいというのが、創設当初からの私の願いなんです。

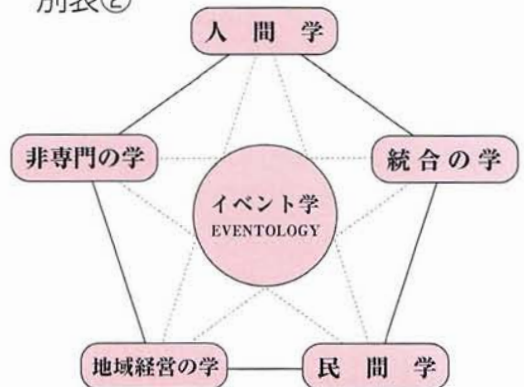
望月：私は、イベントの専門家ではありませんが、当時「イベント学のようなものを作りたい」とご相談を受け、まず面白いと思ったことが今日に至っています。

私は、80年代には社会変動論に強い興味を持っていました、それが90年代に入ってバブルが崩壊し、経済活動が一気に下降した。政府を軸に様々な経済政策を打ち出してもうまくいかず、もう単純な経済政策では効果がない。ソーシャル・マネジメント的な視点で、社会の立て直しが必要だと思っていたわけですね。

イベントという手法には、一種の社会的な政策を具現化する可能性があるのではないかと。その大きな動きに乗ってみたいというのが、この学会に参加する動機でした。

当時の資料をみますと、イベント学の5つの特徴が記されています。(別表②)

別表②



「統合の学」、「非専門の学」、「民間学」、「地域経営の学」、「人間学」。この5つを柱として10年前にスタートしたわけです。10周年を機にこれを一度見直すのか、この考え方で進むのかという議論は必要ですが、私としては社会にイノベーションを起こす一つの手法としてイベント学を捉えたい。設立時の基本的なスタンスというのは変わらないんじゃないかという想いはあります。

また、当時掲げた言葉として、「イベントは、新しい時代を創造する」「イベントは、新しいビジネスを創造する」「イベントは、次の時代の担い手を創造する」という、3つの創造を考えていました。21世

紀に入り、社会の基点としてクリエイティビティが重視されるようになった。その思想を、我々は10年前から提示しているわけで、かなり先駆的なものと考えていたと思います。この指針をベースに、次の10年後、さらに100年先に向けて議論を起こしていく必要性をあらためて感じています。

司会：お話をうかがって、閉塞感のある社会に何か風穴を開けたいという当時の熱気が思い出されます。長谷川先生はいかがですか。

地方都市の活性化のキーとなるイベントとIT

長谷川：私は、80年代中頃から加速化した東京一極集中に対し、地方都市は何をすべきか？ ということに関心を持ち、地方で新たな人材育成に模索する東北芸術工科大学構想に共鳴していました。当時は、インターネットが勃興期から普及期に入り、ネットワーク社会においては論理的にはどこにいても情報の入手と発信が可能になるはずで地域社会を変える一つのトリガーになるのではないかと、その手法を考える必要があるという問題意識を持っていました。

初めてこの学会の話聞いた当時は「これからのイベントって何かな」と思いましたが、情報化時代、地域活性、イベントの3つのキーワードを複合させて、地域社会を活性化する手法が見出せないかと考えたことから、参加しました。

イベント学に触れて感じたことは、一つには異質のものをまとめる強いリーダーシップ、二番目は常に前向きな未来志向、三番目には最適値を出し切ること。これがキーワードになるのではという印象を持ちました。ネットワーク社会の進化によって、リアルに人が会ったり、モノに触れたりする機会が少なくなるという危惧も聞かれましたが、実際にユビキタス社会を迎えた今、逆にリアルな場での体験を重視する傾向が強くなっています。01年に実施した「インパク（インターネット博覧会）」というネット上の博覧会は、あまり印象に残らなかったのです

が、この経験を踏まえても、ネットワーク社会とリアルなものを結び付け、いかに新しいものを創造していくか、これが今後のイベントのキーワードになるのではないのでしょうか。

司会：宮木さんはイベントに関する調査がご専門ですが、最近の意識傾向はどうですか？

宮木：「人々はイベントをどう見ているか」という質問で、05年と07年に調査した結果（別表③）、最も多かったのが「地域振興を促進していく上で重要な要素」なんです。先程、長谷川先生がおっしゃったように、一般の人達も「地域振興」をイベントの役割として感じているようです。一方「うさんくさいイメージがつきまわっている」と回答した人は最も少なく、イベントは非常に良いイメージを持たれていますね。

それと、北本先生のお話のように都市博の中止は、イベント業界に大きな衝撃を与えましたが、その代償として行政が初めてプランニング・フィーを認める前例を作らせた、という話を、学会のレクチャーで牧村真史プロデューサーから聞いたことを思い出しました。この10年を振り返ると、イベントを取り巻く環境もかなり変えています。

学術研究団体登録も視野に —これからの指針を探る

司会：これまで様々な出来事がありましたが、今この学会が抱えている課題、また次の10年への期待といったご意見をお願いしたいと思います。

井関：課題としては、まず若い人材を育てることでしょうね。若い研究者を育てる体制を整えて、十分な研究費も提供しなければいけない。研究大会で、若い人達の研究発表が少ないのは、学術研究団体の資格を持たない体制にも原因があるかもしれません。

司会：事務局として耳の痛い話です。皆さんにお知恵をいただきながら、改善したい課題ですね。

北本：イベント学会のPRのために、98年からずっと全国各都市で巡回開催してい



望月照彦

(もちづき てるひこ)

多摩大学大学院教授

望月照彦研究所代表

イベント学会副会長

◆経歴 1967年 日本大学工学

部建築学科 卒業

1969年 日本大学理工学部大学院

修了

日本大学助手、民間ディベロッパー

を経て独立

1972年 シンクタンク(株) キャ

ル・コーポレーション設立

1977年 日本大学理工学部講師

1990年 望月照彦研究所 代表

◆専門分野：都市創造、まちづくり、

産業振興、商店街開発、ウォーター

フロント等、ハイテクノロジー・パ

ーク、コンベンション・インダスト

リー、ビジネス・インキュベーター、

21世紀型商業等多面的に研究開発

を行い、行政・民間のプロジェクト

を多く手掛ける。

◆著書：マチノロジー<街の文化

学> 創世記

商業ルネッサンスの時代 ダイアモ

ンド社

地域創造と産業・文化政策 ぎょう

せい

都市民俗学講座(全五巻) 未来社

他 多数

◆イベント学会：

2001年 2001年度多摩大会

実行委員長

2002年 「イベントの文化経済

学」 2002年度研究会基調調

演

2006年 2006年度敦賀大会

実行委員長

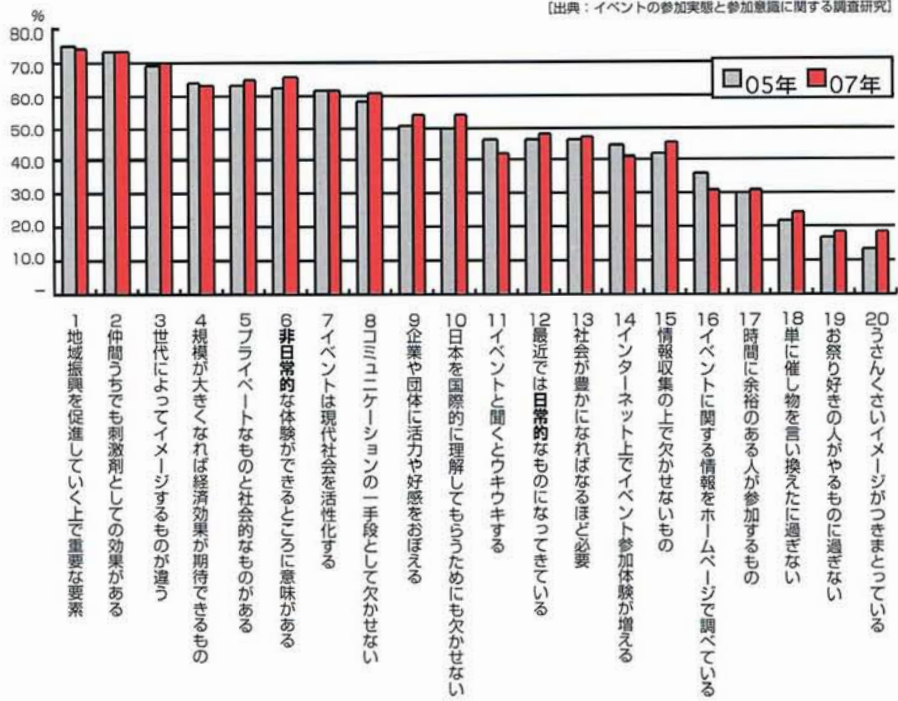


長谷川文雄

(はせがわ ふみお)
 前東北芸術工科大学 理事 副学長
 前イベント学会 理事
 ◆略歴：1974年 電気通信大学大学院修了
 清水建設に入社
 1975年 社会学研究所
 1977年 総合研究開発機構
 1982年 東京大学工学部総合試験所などに出向。
 東海大学、埼玉大学各講師
 1986年 マサチューセッツ工科大学客員研究員
 工学博士（東京大学）
 1989年 東京大学先端科学技術研究センター客員助教授、東北芸術工科大学教授
 2000年 東北芸術工科大学理事 副学長
 2007年 東北芸術工科大学 退任
 ◆専門分野：都市情報学、システム工学
 ◆著 訳書：インテリジェントシティ東京の五年後 1987 講談社
 技術大国米国の読み方 1988 PHP
 アメリカのシンクタンク（訳） 1997 ダイヤモンド社
 マルチメディアが地域を変える 1998 電通
 他 英文論文を含む多数
 ◆イベント学会：
 「イベント環境としてのデジタルネットワークの現状と未来」
 2000年度研究大会基調講演

別表③ イベントとは・・・人々はイベントをどう見ているか

[出典：イベントの参加実態と参加意識に関する調査研究]



るのが年次大会です。(別表①) 最初の横浜市から私と望月さんが替わりばんこに委員長をやっていますが、「イベント街塾」のとき、地元の人とみんなで集まって言いたい放題に言い合って(笑)。ああいった場に若い会員にもぜひ参加してもらいたいと思いますね。

宮木：「イベント街塾」は、昼の大会プログラムが終わった後の「夜学」なんです。市内の何軒かの飲食店で、昼の大会のスピーカーをゲストに地元の町づくりグループや青年会議所の有志が2~30人集まり、イベント学の“学”は、楽しい方の“楽”でいいじゃないかと、縦割りの物の見方を取り払って飲みながら話し合う、非常に盛り上がりましたね。

長谷川：井関先生は、学術研究団体登録はやるべきではないというご意見だったと記憶していますが…。

井関：10年経って、そろそろ長谷川先生のご意見を取り入れなければいけないかな(笑)という気持ちが強くなってきたんですよ。確かにあの当時は楽しいことが一番重要だった。しかし、楽しいだけで人を育てるのは難しい。きちんとした学会誌を出し、若い研究者を育てないと、単なる同好の志の集まりに過ぎないと言われかねない。今後の発展を考えると、学術研究団体登録の方向性も視野に入れ

る必要があると考えているんです。

望月：長年模索してきた結果、方向性としては矛盾しているようだが、一方は楽しく、一方は学術的という二重らせん構造を実現していこうということが見えてきましたね。

長谷川：10年間、あえて学術機関として活動しなかったからこそ、色々な角度からイベントを見聞することができたわけです。こうした経験も踏まえて、これから若い人達にどんどん参加を呼び掛け、地域や日本を活性化して欲しいですね。その時に、どのように学べばイベントのノウハウを早く身につけることができるのか、これは学術の研究対象となりうると思っていましたので、ぜひ実現したいですね。

人材育成とスターの創出が今後の課題

北本：そうですね。それとこれからは、ぜひスターを育てて欲しい。スターが登場してくる業界じゃないと、若い人は見向きもしない世の中なのです。少々歳はとってしまったけれど(笑)、応援する気概は十分にありますから、研修や会合を通じて、バックアップしていきたいですね。

宮木：スターとは違うかもしれませんが、「YOSAKOIソーラン祭り」を立ち上げた長谷川岳さんなどは、成功者の一人ですね。当時大学生だった彼が始めたイベントが、今や北海道の一大イベントに成長しているわけですから。

望月：素晴らしい成功例ですよ。例えば、このように学生が始めたイベントが、自分達の予想や思い以上に盛り上がっていく。こうした現象が起きた時に、当事者である彼らは必ず不安や戸惑いを感じると思うんです。「一体どうやって行くのだろう…」と。この学会は、こうしたケースにきちんとした答えを出して対応してあげられるような、そんな機関になるべきだと私は感じています。今後、市民によるイベントというのは益々盛んになっていくでしょう。その時に、長谷川先生のおっしゃったようなノウハウを提供できる団体、あるいはマネジメントを行える組織としての機能が必要だと思うんです。

宮木：これは極めて面白いテーマだと思うんです。イベントのスケールが拡大するほどそういう問題が起きてくる。横浜の野毛の大道芸の場合も、スケールアップするに従って、当初の目的とは違った方向にも広がってしまい悩んでいます。

井関：地域イベントのマネジメントや、行政の課題に対応できるような研究会を立ち上げて、世の中のニーズに答えを出していく必要もありそうですね。

望月：年次大会とか何かの形で、この学会が課題を抱える地域に向いて、地域の人達と一緒に解決策の知恵を出し合うような活動も進めたいですね。

06年の敦賀大会では、この大会をきっかけに、ナチスドイツから亡命しようとするユダヤ人にビザを出し続けた外交官・杉原千畝さんの人道的活動を支えた国際都市敦賀という史実が市民に再認識され、記念館の建設計画を立ち上げているそうです。

井関：この学会を開催した都市は、その後、街が動く、何かが変化するというケーススタディがいくつかできたら素晴らしいでしょうね。

10周年を契機に未来への新たな始動へ

長谷川：地域の活性化だけではなく、イベントをコンテンツという括りで考えると、日本には世界に発信できるものが沢山あります。ネットワークとリアルなイベントを結びつけて何ができるかを模索して、広く世界にアピールすることも考えていきたいですね。

井関：若い仲間が増えれば、自由に意見が言えるようなネットコミュニティを設けてもいいでしょうね。自分の手掛けたイベントの体験談を發表してもらったり、もっと気軽に活動に参加できるし、それこそどこにいてもアクセスできるわけですから。

望月：学会のアクティブな動きそのものがイベントになるような、そんな活動をしていければいいですね。

宮木：10周年はまさにムーブメントの年になりそうな予感がしますね。

司会：2008年は、秋の10周年記念大会、記念出版などを予定して準備を進めております。先生方、会員の皆様も、お忙しいとは存じますが、今後ともより一層アクティブに本学会を牽引していただきたいと思います。本日はありがとうございました。



宮木宗治

(みやき むねはる)

(社)日本イベント産業振興協会 調査・研究本部本部長

静岡文化芸術大学 非常勤講師

イベント学会理事

◆経歴：1973年 早稲田大学 法学部卒

(株)博報堂入社 入社以来、マーケティング業務を担当

1998年 (株)博報堂 事業カンパニー 事業マーケティング部

2002年 (株)博報堂プロスに出向。マーケティング局長

2003年 (社)日本イベント産業

振興協会に出向。調査・研究本部本部長

現在に至る

2004年 静岡文化芸術大学 非常勤講師(広告論、プレゼンテーション

技法)

◆著書：1986年 コンセプト ノート86・共著 PHP

1992年 シティコミュニケーションの時代—先鋭化する都市へのアクセス

総合ユニコム

1998年 一般市民のイベントイメージ 日本イベント産業振興協会

2006年 「メディアの地殻変動とイベントの再生」日経広告研究所報

◆イベント学会

2003年 イベント学会・研究大会シンポジウムコーディネーター

2005年 イベント学会研究大会実行委員長



溢れる坩堝、変質する触媒

イベント学における 「イベントの科学」の役割

エス・エフメーカーズ株式会社

取締役プロデューサー

梶原 貞幸

イベント学会が創立10周年を迎え、イベント学がその姿をより明確にし、より豊かに発展していくためには、様々な「知」や「学」の坩堝や触媒の役割を果たすものとして、イベントづくりの実務知識から構築された、実学としての「イベントの科学」が必要ではないかと考えています。

「坩堝」とか「触媒」といった、ある意味で手垢にまみれた用語をもって「イベントの科学」（「イベント学」ではなく「イベントの科学」）を説明するのは、それが従来から私たちが馴染んでいる科学の概念、即ち、分類と客観的分析を基本手法とした「体系的であり、経験的に実証可能な知識」（広辞苑）という「科学の概念と手法」をもってイベントを考えようとしているからです。

一方、イベント学は「イベントの科学」を大きく超えた学です。イベント学とは、「イベントを、一つの専門、一つのパラダイムによって閉じ、完結した体系をつくることを目的とする学ではなく、さまざまな知の方法により、諸科学横断的な知識と、多様なノウハウを統合する学である（統合の学）」（イベント学会設立趣意書）であり、「閉ざされた学問から開かれた学問へ」（井関利明氏）と、従来の科学のパラダイムを大きく超えた学です。

それでは、イベント学の中にあつて「イベントの科学」はどのような役割を果たすのでしょうか。先ず言えることは、「イベントの科学」はイベント学という大きな器の中にあつて、諸科学を融合する坩堝や触媒の役割を果たすだろうということです。イベント学が貪欲に取り込んだ諸科学は、「イベントの科学」という坩堝に取り込まれ、或は、その触媒作用によって融合していきます。しかし、従来の偏狭な「科学」というパラダイムにあつて、その坩堝はすぐに溢れてしまうでしょうし、また、それに触れたものを激しく変化・融合させる一方で、自身は変質しないのが触媒なのですが、触媒としての「イベントの科学」は、それ自身もまた変質していくのです。

「イベントの科学」という坩堝から溢れ出た諸科学は豊かにイベント学という器を満たし、変質し続ける触媒は、多くの諸科学をイベント学という器の中に取り込んでいくでしょう。「統合の学」「開かれた学問」の中にあつて、その片隅で、古いが柔軟な学の体系をもった「イベントの科学」は、着実にその役割を果たしていくでしょう。

次に、「イベントの科学」の体系や構造について私見を述べたいのですが、紙幅の関係で、次の機会に譲らなければなりません。イベント学会10周年を迎え、最近とみに思いを強くしていることを述べてみました。

社会変革はイベントで

Landa Associates Ltd.

代表

宮本 倫明

イベントとは何か？イベントの定義や領域とは何か？イベントをめぐる議論は当学会でも尽きない。個人的な誕生日パーティーや結婚式もイベントだし、万博やオリンピックといった国家レベルの行事もイベントと呼ばれる。音楽やスポーツなどのエンターテインメントの興行もイベントだし、企業の様々なセールスプロモーションやブランディングの諸活動にもイベントは欠かせない事業として認知されている。

これら一見ばらばらで一つの概念に収まりそうもないイベントを理解する手立てとして、3つのアングルが有効ではないかと思う。一つは、「形状的特徴」から、「イベントは一時的に人を集める、または人が集まる催し」として捉えることができる。二つ目は「機能的特徴」に注目して「イベントは、特殊な物理的、情報的環境による特殊な情報伝達手段（メディア）」であると捉えることができる。この二つについて大方の異論はないと思う。三つ目に私が個人的に注目するのは、イベントが持つ「質的特徴」である。

「質的特徴」を考える中で得たひとつの結論が、「イベント」の概念を形成する重要な要素として「変化」という概念が大きくその位置を占めているのではないかという仮説である。

すなわち「イベントは変化を象徴する、または変化を促す」という理解である。

誕生日がイベントなのも年が「変わる」からであり、結婚式や葬式も家族のかたちが「変化」するからイベントなのだ。個人においてのみならず、選挙や革命などの社会的活動においても、政治の在り方を「変える」という視点から見れば、私にとっては興味の尽きないイベントとなる。

娯楽は日常の生活のリズムや感覚を、心地よく楽しい状態に「変える」、いわば気分を「変える」という本質が潜んでいるし、セールスプロモーションのイベントなどは、購買動機を造り出すという本来の目的のために、まさに消費者の意識や認識を「変える」イベントがいいイベントとして評価される。

イベントは、参加する人に主体的コミットメントを要求する。また、イベントは参加者間にコアクティブなネットワークや創発を産み出す。さらにイベントは人間や環境それ自体が、メッセージとしての役割を果たす統合的な場（エモーショナルメディア）でもある。

これらイベントの特性を活かせば、小さなところからでも大きく社会を変革させる動きを創り出すことができるのではないだろうか。今後、政治や行政に頼らない社会変革（ソーシャルイノベーション）が益々求められる世の中になってくる。イベントが、そうした社会の諸問題を解決するうねりとなってくれることを確信してやまない。

全国のイベント人による明日の地域や世界を変えていく野心的な取り組みが期待される。

『イベント学のすすめ』 出版に向けて

イベント学会10周年記念出版委員長

上智大学

師岡 文男

私がイベント学会の存在を知ったのは、小生が招致から運営までを手がけたIOC後援の非オリンピック種目の国際総合競技大会「ワールドゲームズ」について学会が刊行物に取り上げてくださったことを知り、江戸開府400年記念イベントで望月学会副会長とご一緒させていただいた2003年のことでした。生来の祭男でイベントが大好きな私は学会の存在に驚き、その役員や会員の方々の豪華な顔ぶれにビックリしました。しかし、同時に何故このユニークな学会が大学や世間一般に知られていないのであろうか、と疑問に思ったものでした。

恐縮なことに2006年から理事職を拝命し、この度学会創立10周年記念事業担当理事の一人に任命されたとき、まっ先に提案したのがイベント学を世の中に向けて説明する分かりやすい本の出版でした。言い出しっぺが責任をとらされるは世の常で、出版委員長に祭り上げられてしまいました。こうなったら学会新参者として開き直り、一般市民の視点でイベント学の幅の広さ、ユニーク性、具体的な内容が理解できる本を編集することを決意しました。出版委員会やイベント学懇談会、学会運営会議で内容を検討し、堺屋会長の承認も得て、出版社を（株）ぎょうせいと決め、創立10周年記念学会大会を目途に発行するべく、下記のような構成で様々な学会員に執筆をお願いし始めたところです。

この本の編集会議の中で出てきた企画が、今回の会報に要約を掲載した創立時から積極的に学会活動を行ってこられた方々による「イベント学会の10年を語る」座談会です。学会10年間の歴史の集大成ともいえる内容で、私自身大変良い勉強になりました。この座談会では、今まで日本学術会議への登録に反対されていた役員の方が登録のメリットを語られるなど、これからの10年間を考えるためにも貴重な記録となっています。本には全内容を掲載する予定です。

とにかく発行まで時間があまりありませんが、学会の名刺代わりになるような本を発行すべくがんばりますので、皆様のご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

<本の章立て>①巻頭言、②基本概念、③歴史・民族・宗教、④社会・政治、⑤経済・経営・マーケティング、⑥心理学・行動科学、⑦教育、⑧観光、⑨都市工学・建築、⑩文化・芸術、⑪スポーツ、⑫環境、⑬法律、⑭人材養成、⑮コミュニケーション、⑯資料、⑰座談会「イベント学会の10年を語る」

イベント学会10年を 振り返って

～間宮聰夫副会長の足跡～

順天堂大学

野川 春夫

社会的に大きな影響力をもつ大規模スポーツイベントのプロデューサーとして、間宮副会長は本学会発足当時からイベント大学「スポーツイベント学講座」を開講し、当時のJリーグ川淵チェアマン、IMGマーク・マコーミック会長を筆頭とするプロスポーツイベントの革新的な情報を学会内外に発信した。1998年に順天堂大学に赴任した筆者は、間宮さんに半ば強制的に本学会に引きずりこまれた。既成の学術団体とは異質で発展性を予感させる会員の顔ぶれと方向性に驚かされたのが、最初の正直な印象である。

「観るスポーツ」「魅せるスポーツ」を間宮さんは「メディアスポーツ」と呼び、スポーツイベント市場とスポーツGDPの測定、スポーツイベントのボランティアや観戦者研究、スポーツイベントのマーケティング等を精力的に進めていた。2002年のFIFAワールドカップ日韓大会ではボランティア調査を日韓において実施し、第6回研究大会でその研究知見を披露している。21世紀のイベントのコンテンツには、スポーツと音楽が重要な役割を果たすという予見を常に語り、イベント学会の研究テーマとしてスポーツイベントを多角的・学際的に広く議論すべきであると主張していた。

本学会発足10年目のメインテーマに『スポーツイベントが都市にもたらすもの』が決まった際には、実行委員長に指名された筆者に、大規模なスポーツイベントが都市にもたらす効果の研究として、オリンピックは絶好の対象であり、イベント学会としては是非東京オリンピックを誘致するための議論を触発し、広く社会に問い掛けるという方向性を指示してくれた。間宮さんのアドバイスのお陰で昨年の研究大会では、大規模スポーツイベントを支えてきたスポンサーシップやマスメディアの放送権料の他に、ボランティアや市民参加が不可欠となってきた21世紀のスポーツイベントは、どのようなイノベーションを都市にもたらすのかという視点で、各界を代表する方々に議論を深めていただいた。

自身が総合プロデューサーとしてマネジメントした'91年東京世界陸上選手権大会と昨夏の大阪世界陸上選手権大会を題材に、メガスポーツイベントのマネジメント比較研究にも意欲を持ち、体調を崩しながらも自分の目でイベントを視察し、新著「スポーツイベントのマーケティング」への原稿の執筆を続けていた。筆半ばにして72歳の生涯を閉じられたが、逝去される1週間前まで日米のプロ野球や北京五輪、ゴルフトーナメントなどのスポーツイベントを対象とした研究に意欲を燃やされていた。

合掌

イベント学会10周年記念研究大会は、平成20年9月3日(水)・4日(木)上智大学で開催予定!!

研究発表者・参加者募集要項は4月初旬に発表します。

◎ 2007年度助成研究が決まりました。

イベント学会研究助成制度による研究テーマが以下の3件に決まりました。研究成果は研究大会などで発表していただく予定です。

① 「更科日記歴史街道実現のための基礎研究」

—古典文学作品のイベント化に関するケーススタディとして—
助成対象者：更級日記歴史街道振興協議会(代表 吉村光男さん)

② 「イベントとソーシャルマーケティング」

助成対象者：ソーシャル・マーケティング研究会(代表 金優佳さん)

③ 「地域保健事業推進者へのイベント教育導入に関する可能性の検討」

助成対象者：高田 佳子さん

◎ 会員による交流イベントを支援しています。

イベント学会では会員同士の様々な交流活動を支援しています。現在は東京を中心に以下の活動を開催しています。会員の皆さんからのご希望があれば各地にお伺いしますので、事務局までご相談ください。

「イベント学懇談会」—師岡文男理事(上智大学教授)を座長にして様々なテーマで時にはワインを楽しみながら自由に意見交換をする懇談会です。イベント学会10周年記念出版はこの懇談会の成果です。

「専門研究部会」—特定の研究テーマを掲げて専門的に研究発表を行う部会活動です。今年から「イベント評価マネジメント研究会」がスタートしました。今後は「イベントとIT研究会」「イベントと環境研究会」などが発足する予定です。

「金曜サロン」—会員の皆さんが様々な分野のユニークな方々と交流してヒューマンネットワークを拡充していただくために毎月最終金曜日に開催する異分野交流会です。

イベントに関する技術、サービスのプレゼンテーションと懇親パーティが中心です。

◎ イベント学会入会手続き

- 1) 入会ご希望の方は「入会申込書」(会員種別)にご記入の上、イベント学会事務局宛で郵送ください。「入会申込書」は、イベント学会ホームページからダウンロードするか、直接事務局にご請求ください。
- 2) 申込者については理事会等で審査し、入会を承認された方には「入会承認書」と「振込案内」をお送りしますので、入会金(初年度のみ)と年会費を指定の口座にお振り込みください。
- 3) これ以降、会報「イベントロジー」や「研究報告書」、大会・部会などのご案内をお届けします。

2008年度イベント学会会費一覧(2008年4月~2009年3月末)

会員種類	入会金	年会費	備考
1) 個人会員	5,000円	10,000円	研究者、実務者などの個人
2) 準会員	なし	2,000円	大学生、大学院生、専門学校生など
3) 自治体会員	20,000円	50,000円	地方自治体
4) 法人会員	(1口) 100,000円	(1口) 100,000円	企業、団体などの法人

※法人会員は1口以上